

いたしん ニュース

ITAMISHI KONCHUKAN NEWS

第44号 2025/3

特集 チョウの飼育の現場から



チョウの飼育で最も大事なこと

チョウの飼育で最も大事なことは新鮮で質が良く、無農薬の食草を一年中、十分な量で確保することです。食草とはチョウの幼虫が食べる植物（エサ）のことです。そのために大阪国際空港の近くにある桑津農場で、約 10 種 600 株の食草を鉢植えで栽培しています。また、伊丹スカイパーク内や昆虫館裏の敷地内に地植えしたカンキツ類があり、さらに館内の養生温室とその周辺に約 300 株を管理しています。栽培種はチョウ以外の昆虫の食草も含めて、30 種以上にのぼります。



桑津農場の食草栽培の様子

桑津農場のスタッフは、新鮮な食草を与えるために、毎朝必要な分量を剪定して配達します。また質の良い食草にするために、適切な施肥と手作業での害虫駆除（アブラムシやカイガラムシ、ハダニなど）、剪定や植え替えのほか、種まきおよび挿し木などで株の更新をしながら維持しています。

食草ごとに、温度さえあればいつでも生長する種、冬季には地上部が枯れる種、生長には夏の暑さが必要な種、逆に暑さで生長がとまり、質が悪くなる種など植物の生態と季節の関係はさまざまです。一年中飼育するため私達はそれらを見越して栽培します。つまりある種の食草にとって生育不良な

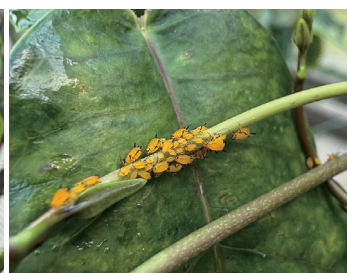


昆虫館裏のカンキツ畑；肥料をまいているところ

季節には、代用できる食草に置き換えるのです。例えば、スジグロカバマダラの食草であるリュウキュウガシワは、秋から翌年の初夏までエサとして使いきります。秋に種を収穫し、苗を初夏から秋まで剪定せず、伸ばし放題に栽培します。その間は初夏に盛んに生長するガガイモを使用します。ガガイモは秋には地上部が枯れ、冬はエサとして使えません。このように季節による食草の生長にあ



ミカンハモグリガの幼虫
摂食により葉が縮れる



キョウチクトウアブラムシ
吸汁および甘露によるスス病の発生



イセリアカイガラムシ
吸汁および甘露によるスス病の発生



カイガラムシの一種
吸汁および甘露によるスス病の発生

わせて、異なるエサを切り替えて飼育に使います。ほかにもジャコウアゲハの食草となるウマノスズクサ（初夏から晩秋使用）→リュウキュウウマノスズクサ（秋から翌初夏使用）への切り替えをしています。切り替え（代用）植物がないツルモウリンカやセイタカスズムシソウ、ホウライカガミなどは、種や挿し木で株を増やしながら、栽培量を確保します。

冬でも新芽がほしい食草は、寒い野外から暖かい温室内に入れ、軽く剪定して芽吹きを促します。特にギョボクやカンキツ類は幼虫の食いつきに大きく影響するので計画的に行います。もちろん寒さに弱い沖縄地方の食草は、冬季は桑津農場の温室内に暖房を入れて栽培します。食草栽培において、冬は害虫との戦い、夏は暑さとの戦いです。新鮮で質が良い食草をいかに確保できるか、それがチョウの飼育において最も重要だと考えています。



飼育室横の養生温室。冬は日当たりが一番良い

げんば の現場から

する累代飼育をしています。安定して飼育・展示するための様々な工夫と技術を紹介します

チョウを一年中展示するための工夫

チョウ温室では、成虫が途切れることなく、コンスタントに放チョウできるかが重要だと考えています。ほぼ同時期に羽化した成虫をチョウ温室に放っても、寿命が来たらほとんどが同時期に死んでしまい、育てている幼虫が羽化するまでチョウ温室から成虫がいなくなるのです。そこで羽化のタイミングが集中しないよう「ずらす工夫」をしています。

その一つが温度条件を変えて飼育することです。昆虫は飼育温度によって一定の成長スピードを示します。当館では、卵から幼虫・蛹・羽化するまで温度、湿度、日長（明るい時間の長さ）を調節できる恒温室（こうおんしつ）という部屋で育てます。恒温室内の飼育条件は温度 25℃、相対湿度 55%、光周期 16L: 8D（明期 16 時間、暗期 8 時間；長日条件）です。そこでインキュベーター（温度調節ができる別の機器）を使い、同じ光周期でも、温度を 22℃や 19℃、16℃などに下げて飼育するのです。すると成長に時間がかかり、羽化までの日数が長くなります。例えば、アサギマダラのふ化から羽化までの成長日数は、25℃では約 27 日ですが、18℃では約 50 日にのびます。またコノハチョウは、ふ化から羽化まで 25℃では約 33 日のところ、19℃では約 60 日と倍近くに成長日数が長くなります。こうやって羽化のタイミングを分散させるのです。



昆虫飼育室、通称「恒温室」。チョウの卵から蛹までを管理。ほかに希少種も管理している



インキュベーター内で低温飼育中のアサギマダラ

もう一つの「羽化のタイミングをずらす工夫」は、休眠を利用することです。アゲハとナガサキアゲハを対象に、光周期だけを 7L: 17D（短日条件）に変えて飼育し、「もうすぐ冬が来るよ」と思わせて、幼虫に休眠蛹になってもらうのです。昆虫学においては短日条件は 12L:12D がスタンダードですが、当館ではスタッフの作業の動きに合わせて 9 時に段ボール箱から明るい棚に幼虫を出し、夕方 16 時に暗い段ボール箱に入れます。同じ 25℃の恒温室内で光周期を短日条件にするだけで、冬越しする休眠蛹へと誘導します。



休眠用の段ボール箱

例年、秋に大量に飼育した 60～100 個体ものアゲハの休眠蛹は、5℃の冷蔵庫に 75 日～125 日（最長 200 日）入れて低温処理をし、それから 25℃の恒温室にだします。お



5℃の冷蔵庫で冷やされているアゲハの休眠蛹

よそ 10 日から 14 日で羽化するので、冷蔵庫から出す日を 2～3 週間間隔で計画的に設定すれば、新芽のとぼしい時期の 1 月から 3 月頃に春型のアゲハをチョウ温室に飛ばせます（詳しくはいたこんニュース 23 号 P.5「アゲハの休眠蛹に挑戦」、28 号 P.6「この冬、アゲハ類の休眠蛹、大量です」を参照してください）。

しかもナガサキアゲハの休眠蛹は冷蔵庫に入れなくても、そのまま 25℃の恒温室においておくだけで羽化します。通常約 15 日の蛹期間が 40～50 日前後にのびるので、羽化のタイミングをずらすには最適な



ナガサキアゲハの通常飼育の蛹と休眠蛹

方法です。むしろ冷蔵庫にいれると羽化率が低くなってしまいます。このように一年中チョウを展示するためには、コンスタントに羽化させることが重要です。

逆に、キタキチョウは成虫越冬する秋型がでないように、夏から冬にかけては、卵やふ化幼虫を温室から回収し、長日条件で飼育しています（詳しくはいたこんニュース 35 号 P.5「キタキチョウ、一年中展示しています」を参照してください）。

飼育はきめ細やかな観察から

2003年7月発行のいたこんニュース創刊号特集「チョウ温室の舞台裏」には、10種1,000匹程度の幼虫を飼育しているとあります。現在は約10種500匹の幼虫を一日あたり3～4人のスタッフが、約4時間程度で飼育しています。飼育する幼虫を減らしているわけではなく、飼育技術が向上し、少ない数でも羽化まで育てあげることができるようになりました。

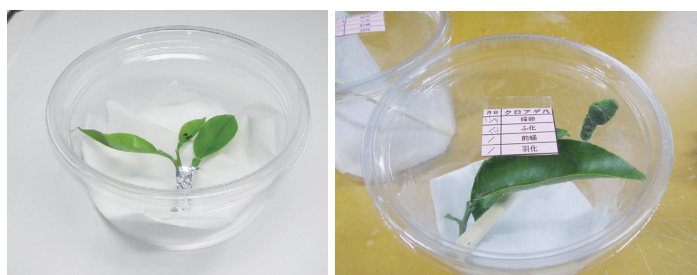
スタッフの作業は年間365日毎日です。食草の栽培量や幼虫の調子、作業時間、チョウ温室内の成虫の状況を考慮し、1種あたりの幼虫の飼育上限数を担当者が決めています。例えば、通常オオゴマダラは1齢幼虫から5齢幼虫までをあわせて上限50匹としています。食草が潤沢になる夏は、ふれあい体験のイベントもあることから上限を60匹に増やし、逆に冬は食草が枯渇するので上限を40匹に減らします。このため、一日あたり0～5匹までとふ化幼虫の数を調整します。



オオゴマダラの幼虫（かごの中には卵、1～5齢幼虫、前蛹などが段階的にある）

ふ化したての1齢幼虫には、新芽などのやわらかい葉を、5齢になると食欲に合わせた葉っぱの量を、そして蛹になる直前（ほとんど葉を食べない）の幼虫を見きわめて食草を節約して与えます。

ひとつのカップで飼育する幼虫数は、ふ化幼虫は基本的に3匹程度で、最大6～8匹までです。大きくなるにつれ、カップ内の幼虫を分けていき、最終的に5齢幼虫は1匹にして前蛹まで育てます。カップの中の幼虫数が少ないと全体のカップ総数が増え、手間と食草のロスがふえます。ただ大きくなっても1カップ4～5匹で飼育すると、食草不足や病気による感染などにより成長に大きな影響が出てきます。そのあたりの判断は飼育スタッフの経験とスキルにかかってきます。



左) 新芽を与えたアゲハのふ化幼虫 右) 5齢幼虫は1匹で飼育

累代飼育においては、病気のまん延を防ぎ、健康な個体群を維持することが重要です。そのためエサの追加・交換やフンの掃除の際に、飼育スタッフは幼虫の状態や成長が順調かどうか毎日観察します。その判断は、死亡しているかどうかだけでなく、良い糞がたくさんあるか、カップの中は変な臭いがしないか（だめな幼虫のカップの中は生臭いにおいがする）です。そして成長記録を参考にします。



左) ツマベニチョウ死亡個体 右) アゲハ類の死亡個体

飼育カップには全てラベルがつけられ、採卵・ふ化・前蛹といった変化のあった日付を書き込みます。これをみて平均的な成長日数より、大幅に遅れている幼虫がいれば成長不良と判断します。かわいそうに思うかもしれませんが、すくすく育つ健康な個体だけを残して、上限にあうように新たにふ化幼虫を増やします。成長不良の原因は定かではありませんが、食草の品質に大きく影響を受けます。また農薬などの薬剤も幼虫の全滅に繋がります。

蛹になる直前も丁寧な飼育が続きます。カップ内が濡れていると糸がはれず、前蛹が落ちやすくなります。そのため、カップの中の水滴はしっかりふきとりま



割り箸で前蛹になったクロアゲハ

す。前蛹になる場所として割り箸をいれる際も、割り箸の下方の空間には葉っぱなどの障害物がないように配置します。

帯蛹になるアゲハなどの前蛹が落下した場合は、ティッシュペーパーのおくるみに入れ、蛹化を手助けします。

また羽化の際に、万が一成虫が落下した場合に備え、上に登って翅を伸ばせるよう、カップ内の側面と天井にティッシュペーパーをはさみます。

ちょっとした工夫ですが、1匹でも多く羽化するまで成長できるよう、飼育作業をしています。それでも当館のすべての幼虫が正常に羽化するわけではありません。



左) 落下したクロアゲハの前蛹 右) 2日後蛹になった



羽化のためのカップ

チョウの飼育の一日のながれ

開館前の 9:00 すぎ、飼育スタッフはチョウ温室のみつ皿に、蜜ジュースをいれたお皿をセットします。また 1 週間に 2 回程度はコノハチョウ用の腐った果物のお皿に蜜ジュースをふりかけます。あまりにも柿やバナナなどの果物が腐りすぎている場合は交換します（詳しくはいたこんニュース 39 号 P.5「みつ皿のジュースと果物」を参照してください）。別のスタッフは、学習室のさなぎ展示や食草の鉢植えに幼虫をとまらせた「たからせ展示」の状態をチェックします。その後、桑津農場に食草の電話注文をします。



左) みつ皿の設置と蜜ジュースを補充 右) クロテンシロチョウの採卵用食草を設置

9:20 ごろ、朝の作業が終わって、幼虫の飼育を開始します。病気等のまん延を防ぐため、調子のよい種から順番にお世話します。



飼育スタッフによるチョウの幼虫飼育

チョウ担当の学芸員は定期的にチョウ温室の植物で発生するツマムラサキマダラ(ガジュマル、ベンジャミン) やキタキチョウ(モクセンナ) の状況を確認し、幼虫を見つけ次第回収します。ほったらかしにしていると、植物が食べ尽くされて枯れてしまったり、寄生バエや寄生バチが出現したりして、後々やっかいなことになるのです。



左) ハッサクの植木鉢でのアゲハの強制採卵 右) スミレに産卵するツマグロヒョウモン

そのほか、採卵するための食草鉢の確認をしながら温室を巡回します。飼育状況によっては、産卵が少ないチョウのメス成虫を捕獲し、卵をうんでもらう「強制採卵」を行うことがあります。産卵が少ないということは、温室に飛んでいるメス成虫が少ないということなので、見つかるまで必死で探します（詳しくはいたこんニュース 18 号 P.6「チョウの強制採卵」を参照してください）。

13:00、その日の羽化したチョウを種および雌雄で記録し、放チョウ体験のスタッフに引継ぎます。14:00、卵や幼虫の処理、飼育道具の洗浄・消毒、乾燥までを行い、飼育スタッフはチョウ以外の昆虫の飼育へ行きます。



左) 昨日消毒したカップをすすぐ 右) 使用した飼育道具の消毒

15:45、食草の害虫駆除、蛹つけ、アルミホイルや綿、ラベルなど飼育道具の補充、各所清掃をします。また寄生バエの予防、クモの糸や汚れを除去するため、カンキツの葉を軍手でなでるように表面を洗います。この作業をするようになって、寄生バエの発生がほとんどなくなりました。



食草の洗浄

16:00、チョウ温室の食草に産み付けられた卵を回収し、記録します(採卵)。チョウの種ごとに産み付ける植物がちがうので、温室の 8 種の食草鉢から、その日産んだ卵をひと粒ずつ葉っぱから取ります。2 人がかりでおよそ 30 分程度。夏場は汗だくです。ついでに朝セットしたみつ皿を回収します。ずっとおいておくと、アリの行列ができてしまうのです。



左) 食草鉢から産卵された卵を回収 右) 採卵用食草に産卵するクロテンシロチョウ

不定期で蜜ジュースの調合、食草への施肥、食草鉢の移動、種まきなどの作業もあります。このような流れで、一日一日の飼育が 365 日つながっています。(角正美雪)

「さいきんの

財団 30 周年記念祭「プレイ☆ ITAMI」を開催しました！

2024 年 9 月 8 日（日）～11 月 10 日（日）に、公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団 30 周年記念祭「プレイ☆ ITAMI」を開催しました。

財団各施設（東リ いたみホール、伊丹アイフォニックホール、アイホール、市立伊丹ミュージアム、ラストホール、図書館南分館、昆虫館、伊丹スポーツセンター）では「ちょうちん特別展示」などの催しがあり、三軒寺前広場では 11 月 10 日（日）に「広場イベント」の開催や「テントブース」の出展を行いました。

また、期間中「財団キャラまつり」と題して、各施設のオリジナルキャラクターを紹介するイベントも開催し、大いに盛り上がりました。

伊丹市昆虫館では、「広場イベント」にテントブースを出展し、昆虫とのふれあいや、ハチミツしぼり



ちょうちん展示



広場イベントでのハチミツしぼり体験と試食

体験&試食、友の会会員によるキーホルダーづくりを行ったほか、ステージでの昆虫クイズ大会、財団 30 周年記念「いたみ文化・スポーツ財団 みらい図鑑」の発行を手掛けました。

公益財団法人いたみ文化・スポーツ財団では、各施設などで様々な催しを今後も開催していきます♪これからもどうぞよろしく願いいたします。

（西 史夏）

ハンミョウの成虫と幼虫を展示

生態展示室では 2024 年の 8 月頃からハンミョウを展示しています。阪神地域で採集された個体を数匹入れたところ、展示ケース内で交尾や産卵行動が観察され、やがて底面に敷いた土の表面に小さな丸い穴がいくつも見られるようになりました。無事に幼虫がふ化したということです。ハンミョウは里山の林道や公園の広場、神社の境内などの、ひらけた場所に暮らし、成虫および幼虫ともに小さな昆虫などを捕食しています。幼虫は地中に 10～20 センチほどの縦穴を掘り、巣穴付近を通る獲物を待ち伏せして捕食します。展示ケース内では生きたコオロギの幼虫を放したり、ナナフシの幼虫を軽く潰したものを巣穴に被せたりして給餌しています。3 月現在は成虫 2 匹、2 齢から 3 齢幼虫の巣穴が複数観察できます。巣穴の入り口に頭部を覗かせている幼虫もたまに見かけます。無事新成虫が羽化すると良いと思っています。隣のケースでは生息域外保全を行っているオガサワラハンミョウも展示中です。

（野本康太）



ハンミョウの成虫と幼虫の巣穴（大：3 齢、中：2 齢、小：1 齢）

飼育室から

博物館活動奨励賞および矢島賞を受賞

2023年12月12日に山梨県の北杜市オオムラサキセンターで全国昆虫施設連絡協議会が開催されました。年に1回、加盟している全国の昆虫施設が集い、研究発表とともに情報交換し、昆虫施設の発展に向けて交流する場となっています。私は「ミュージアムショップの運営と商品開発について」と題し、昆虫館におけるミュージアムショップの運営と今後の展開および課題について発表しました。その内容を「昆虫園研究」に投稿し、翌2024年11月矢島賞奨励賞を受賞しました。矢島賞とは、多摩動物公園に日本初の昆虫生態園をつくるなど近代昆虫館の父といわれた昆虫学者である矢島稔先生が、昆虫施設の発展にと創設された賞です。

また、2024年11月27日、長野県松本市で開催された第72回全国博物館大会にて、博物館活動奨励賞受賞の表彰式に出席しました。この博物館活動奨励賞は、博物館関係者の資質の向上と意識の高揚を図るため、公益財団法人日本博



表彰式の様子

物館協会が毎年、有識者による選考委員会を組織し、「博物館研究」掲載原稿の中から選ばれた優秀な報告レポートに対し贈られるものです。

私は博物館研究令和5年7月号(Vol.58 No.7)の特集「博物館とトイレ」編で「伊丹市昆虫館におけるトイレを使った展示の一例」と題し、むしのうんこ展などフンをテーマにした展示の中で「トイレ」を展示テーマを際立たせるアイテムとして、そのアイディアと成果を述べました。選考理由として斬新な発想と実践が、小規模館の展示の検討に新鮮な発想をもたらすことを期待され、選ばれました。

どちらも大変栄誉ある賞をいただき、今まで取り組んできたことを認めてもらえたという実感だけでなく、展示とは？ショップとは？昆虫館とは？博物館とは？と改めて深く考えるきっかけを頂きました。この場をお借りしまして、かかわってくださった皆様に感謝申し上げます。

(角正美雪)

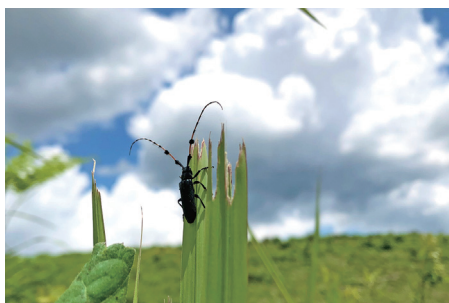


投稿文の掲載誌

フサヒゲルリカミキリの再導入試験

伊丹市昆虫館では現在、8種の絶滅しそうな昆虫の生息域外保全(施設内で累代飼育し、絶滅を回避すること)をしています。そのうちの1種、フサヒゲルリカミキリを、まだ試験段階ながら鳥取県内の過去の生息地に放した(再導入)ことが、環境省中国四国地方環境事務所より報道発表されました(2025年1月16日付)。その場所、大山山麓の杵水高原は本種の多産地だったのですが、高度経済成長期の開発により、完全に姿を消してしまったのです。

それから60年以上の時を経た現在、フサヒゲルリカミキリの確実な生息地は、残りあと1ヶ所になってしまいました。生息地を1ヶ所でも増やすため、また定着するにはどのような条件が必要なのかを知るため、環境省が再導入試験を実施し



草原に生息するフサヒゲルリカミキリ

した。2024年6月18日に、102個体(うち86個体は当館で育てました)を杵水高原に放虫し、これからモニタリングを続けていく予定です。

再導入した場所に定着したかどうかはまだわかりませんが、保全活動としては一歩前進したかたちとなります。本種が杵水高原の、自然再生の象徴になればと願っています。本種の再導入は、生息環境の再生や維持、土地所有者や近隣住民との調整、放虫後のモニタリングなど、多くの人が関わって「自然をまもる」一大プロジェクトなのです。

(田中良尚)



フサヒゲルリカミキリ放虫の様子

展示・行事の一覧と申し込みのウェブページ

当館のウェブサイトにて、展示や、講座・観察会等の行事一覧のページを作りました。また、予約申込制の行事もウェブ上からお申し込みいただけるようになりました。スマートフォンからはこちらの QR コードを読み取ることでご覧いただけます。



展示・行事の一覧ウェブページ
https://www.itakon.com/news/events

(長島聖大)

【行事】

4月12日(土)	生物多様性シンポジウム 絶滅しそうな昆虫の「いま」	
日本チョウ類保全協会と伊丹市昆虫館の共同企画です。日本各地の絶滅しそうな昆虫の現状と保全の活動について紹介します。私たちが何が出来るか考えてみませんか。※会場は昆虫館ではありません。チラシPDF		
【時間】13:00-17:00(開場は12:00-) 【料金】無料【参加方法】チラシの2次元コードよりお申し込みいただくか、伊丹市昆虫館に電話ください 【定員】100名【場所】伊丹商工プラザ6階 マルチメディアホール		
毎日開催	放チョウ体験	
スタッフといっしょにさなぎからかえったばかりのチョウを温室に放します。		
【時間】14:00ころ開始【料金】無料(別途入館料が必要)【参加方法】14:00ころに2階学習室で受付		
不定期開催	学芸員と学芸スタッフのトークショー	
スタッフがそれぞれのテーマに沿った内容でお話しします。		
【時間】11:30-12:00【料金】無料(別途入館料が必要)【参加方法】当日受付、開場11:15から定員いっぱいになるまで【場所】1階映像ホール【その他】各回開催日が近くなると「おしらせ」に詳細が掲載。		
5月18日(日) 野鳥副館長 7月5日(土) 田中学芸員 8月9日(土) 前畑学芸スタッフ		
4月19日(日)	ステップアップ野鳥講習会	
フランク线上的の野鳥観察をしたい人の講習会です。昆陽公園で春の渡り、夏鳥を中心に観察します。		
【時間】9:00-11:00【料金】500円【参加方法】予約申込制(申し込みめきり：4月3日)		

展示・行事の一覧の画面

キャッシュレス券売機導入！

キャッシュレス決済に対応した新しい券売機を導入しました。しかも、21.5 インチモニターのタッチパネル式です！初日は、お客様が自分で決済できるのかドキドキでしたが、どの年代の方もスムーズに利用されていました。このご時世、みなさん慣れていらっしゃると思います。

入館券の見た目がレシートになったのは少し味気ないですが、利用する方は便利になったのではないのでしょうか。なお、パスポート、割引券は、今までどおり受付にて承ります。(西 史夏)



キャッシュレス券売機

伊丹市昆虫館友の会に入りませんか？

伊丹市昆虫館友の会は、昆虫や自然と親しみ、学ぼうとする人たちの集まりです。観察会や調査会、ハイキングなど会員だけの行事のほか、年2回の「友の会ニュース」と「いたこんニュース」の送付、当館のミュージアムショップの商品が1割引(一部の商品のをぞく)などの特典があります。友の会の年度は1月から12月まで、年度途中からの入会も可能です。会費は、年間1,500円(3名まで、4人目以降はおひとりごとに500円加算)。

お問い合わせは当館まで。

(長島聖大)



2024年夏の合宿の集合写真

もよおしあんない

*展示・行事は、日程・内容等を変更することがあります。最新情報はウェブサイトをご確認ください。

3月

9(土) 講演会
「チョウが食草を見分けるしくみを探る」
講師：尾崎克久さん(JT生命誌研究館)

29(土) 学芸スタッフトークショー
長島学芸員の
「アリの標本を作ってみよう」
(YouTube 配信)

企画展

2/26 - 5/12 いたみの自然

プチ展示

1/22 - 3/31 昆虫標本のたつじん
2/26 - 3/10 友の会活動紹介

行事の申込方法

観察会や講座等の行事の一覧は、右のQRコードからウェブページをごらんください。予約申込制の行事は、ウェブ上からお申し込みを受け付けております。往復はがき・FAXでのお申し込みをする方は、以下の要項を書いてお送りください。

1. 行事の名称
2. お申し込みの方全員(同伴含む)の氏名、ふりがな
3. 年齢(こどもは学年)
4. 電話番号
5. おすまいの市町村
6. 返信用のFAX番号(FAXがある場合)
(コンビニの送信サービスのような返信の受けられないFAX番号は不可)

往復はがき：〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 伊丹市昆虫館
FAX: 072-785-2306



行事一覧・申し込みのウェブページ

編集スタッフより

ニセセマルヒョウホンムシを飼いはじめました。まんまるでかわいい！早く飼育を安定させて生体展示に出したいです。(ながしま)

学習室で昆陽池公園のナメタジの生体展示を再開しました。ニンジンをよく食べてくれています。(さかもと)

次回(第45号)発行は、2025(令和7)年7月頃の予定です。

表紙写真 チョウ温室のみつ皿で吸蜜するオオゴマダラ(角正美雪撮影)

いたこんニュース 第44号 Vol.22 No.2 (通巻44号)
2025(令和7)年3月発行
発行 伊丹市昆虫館
〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 昆陽池公園内
TEL: 072-785-3582 FAX: 072-785-2306
URL: https://www.itakon.com/
E-mail: itakon@itakon.com

編集 長島聖大・坂本昇
デザイン原案 pico pictures
印刷 アイシー印刷株式会社